

舞台公演映像アーカイブの
利活用のために

撮る、 のこす、 使う!

EPAD2022

EPAD2022 実行委員会

2023年1月

2020年にスタートしたEPAD事業（緊急舞台芸術アーカイブ化+デジタルシアター化支援事業）は3年目を迎えました。今年度は寺田倉庫株式会社、国際演劇協会日本センター及び一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワークが全面協力して、EPAD実行委員会2022を構成し、「デジタルシアター化支援事業-EPAD2022」に取り組みました。本事業は文化庁令和3年度補正予算 文化芸術振興費補助金 統括団体によるアートキャラバン事業（コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）に採択され、舞台芸術映像の収集および権利処理を含む配信サポートを行っています。

今年度の事業のひとつとして、舞台芸術に関するデジタル・アーカイブ化の今後の整備・発展と利活用に向けて、関係団体、関係者間で現状と課題を共有するため、意見交換の機会を設けました。

本報告書では、「デジタルシアター化支援事業-EPAD2022」のうち、舞台公演映像アーカイブの利活用に関して行われた会議やシンポジウムの採録に加え、海外で活動されるプロデューサーの方々による、これまでのEPAD事業へのフィードバックコメントをご紹介します。

PART 1: ワーキンググループを通じて

イントロダクション 04

ワーキンググループ会議のまとめ 05

【各団体のデジタル・アーカイブの紹介】

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 デジタルアーカイブ室 08

慶應義塾大学アート・センター 10

昭和音楽大学バレエ研究所 バレエアーカイブとバレエライブラリー 12

明治大学 唐十郎アーカイヴ 14

多摩美術大学 多摩美術大学研究ポータルほか 16

ダンスアーカイヴ構想 大野一雄デジタル・アーカイヴ 18

【特別寄稿】

中西智範「舞台芸術分野におけるデジタルアーカイブの展望」 20

石本華江「慶應義塾大学アート・センター - ジェネティック・アーカイヴの試み」 21

佐東範一「ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク (JCDN) の DANCE DOOR」 22

ワーキンググループ会議とヒアリングを通して 23

PART 2: シンポジウム

イントロダクション 24

第一部 「教育・研究の現場から」 25

第二部 「国際交流の現場から」 27

PART 3: 海外からのコメント

イントロダクション 29

台湾 | 李惠美 30

韓国 | コ・ジュヨン 30

シンガポール | 浅川いづみ 31

タイ | シリー・リュウパイブーン 32

スイス | 渡辺真帆 32

ドイツ | 橋本裕介 33

ノルウェー | タラ・石塚・ハツセル 33

ワーキンググループ を通じて

EPAD2022 実行委員会では、舞台芸術に関するデジタル・アーカイブ化の今後の整備・発展と利活用に向けて、関係団体、関係者間で現状と課題を共有するため、「舞台デジタル・アーカイブ連携会議」をオンラインで開催するとともに、主として大学などに置かれているアーカイブ等の担当者をメンバーとするワーキンググループを設置して、各大学の芸術分野のデジタル・アーカイブの現状と課題について意見交換を重ねました。ワーキンググループの会議や補足的に行われたインタビューで表明された意見を紹介します。

ワーキンググループ会議のまとめ

■アーカイブは文化の継承・発展と新たな創造のための土台。しかし、マンパワーが圧倒的に不足、経常費が十分ではない

アーカイブの当事者にとっては、アーカイブの重要性は改めて言うまでもないが、その重要性が、文化や学術を担う機関全体や学術振興政策、文化政策において、残念ながら、あまり認識されていないのではないか、ということが異口同音に指摘された。

まず、人員配置が十分ではない。デジタル化したい、すべき資料が膨大にあるのに比して手が足りない。責任者も多くが兼任。専従の専門スタッフが置かれているところは少なく、置かれていても任期付きの嘱託職員なので、研究・発展に重要な暗黙知が継承されにくい。専門性が求められるスタッフが、非常勤、アルバイト待遇で、長く続けられるキャリアとして遇されていない。**専門アーキビストが育たないというより、専門アーキビストに相応しいポストの確立、待遇が不十分なのではないか。**

また、一次資料の保存・管理といった通常のアーカイブ、研究機関として運営されてきた拠点に、新たにデジタル化の要請が高まってデジタル化が始まったという経緯がある。しかしデジタル資料の維持・管理に必要な経常費は必ずしもプラスして予算が確保されない。そこで外部資金の獲得が重要になってくる。

■アーカイブは短期間で完了するプロジェクトではないが…

ワーキンググループで紹介された大学設置のアーカイブは、開設までの準備期間は、私立大学戦略的研究基盤形成事業や科学研究費助成事業など、公的な補助金を得てスタートしていることが多かった。しかし、**アーカイブは開設されて終わりなのではなく、それ以後も維持・管理が必要**で、利活用を促し、さらなる資料収集と整理、保存といった好循環が期待されるものである。外部資金は、新規のアーカイブ開設や、新たな公開のための準備などには獲得しやすいが、デジタル資料の維持・管理に必要な費用、恒常的に必要な専門人材の確保のために継続的に得ることは難しいという。本来は一過性のプロジェクトではなく地道な作業の積み重ね

が必要だが、外部資金獲得のために、アーカイブの本質とは異なる、ある種の「新奇性」が求められているのではないかという意見もあった。

■パフォーミングアーツのアーカイブ化の宿命

早稲田大学演劇博物館の岡室館長は、「舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業」を通称ドーナツ・プロジェクトと命名し、その理由を「演劇やダンスなど舞台芸術は幕が下りた瞬間に消えてなくなってしまう。だから私たち演劇博物館は、舞台芸術のアーカイブをドーナツと呼んできた」からとし、**「演劇やダンスやパフォーマンスは、まさにドーナツホールであり、中心でありながら、それ自体を保存することはできない」**という宿命を説明している。また、慶應義塾大学アート・センターは、芸術作品およびそれらに関する研究資料をアーカイブ化するためのモデルとして土方異アーカイブの開設に着手した。舞踏のように時間の経過と共に消えてしまう形態の芸術活動を対象にしたことから、やはり、残された資料群を通してしかアプローチできないというアーカイブの出発点を明らかにしている。

EPAD事業が主として収集してきた舞台公演映像もまた、舞台芸術作品＝ドーナツホールそのものではなく、資料群のひとつではある。近年はデジタル技術の進展で公演映像の撮影が容易になったことから、その保存・管理、利活用についてのノウハウは、まだ広く共有されるには至っていないのが現状ではないか。

■急がれるマグネティック・テープ・アラートへの対応

2019年にユネスコと国際音声・視聴覚アーカイブ協会 (IASA) は“Magnetic Tape Alert Project”を発表し、磁気テープに収録された貴重な映像が2025年以降は再生不能になって失われるという警告を発し、急ぎデジタル化することを呼びかけている。日本でも2021年10月に国立映画アーカイブが緊急フォーラムを開催しており、また、2014年から2015年度に早稲田大学演劇博物館は全国の劇団や劇場・ホール・博物館等文化施設を対象に、舞台芸術・芸能関係の映像資料の所蔵状況に関するアンケート調査を実施し、多くの劇団や劇場で公演を記録した**映像が「撮りっぱ**

なし」のまま、多くはVHSやそれ以前の媒体で撮られたまま死蔵されていることを把握している。本ワーキンググループでも、舞台芸術の分野で貴重な映像が失われなために、早急な対応が必要だという危機感を共有している。

■デジタル映像、ポーンデジタル資料へのアプローチ

映像の保存・継承のためにはデジタル化すれば済むということでもない。デジタル資料にはデジタル資料の保存の課題がある。デジタルファイル形式の寿命についての答えも出でおらず、将来的にはデジタルファイル形式のマイグレーションが必要となることも予想される。

これまで収集された一次資料のデジタル化と違って、**最初からデジタルである「ポーンデジタル」の資料は、そのファイルが損なわれたら永久に失われてしまう。** これまでのように寄贈を前提としていては収集も叶わない。公演映像は、磁気媒体からデジタル化したものも最初からデジタルで撮られたものも、このポーンデジタル資料として安定的な長期保存が可能な状態で保存されることが望ましいが、各アーカイブが、十分に安心できる長期保存体制をとっているとは言い難いという実状が浮かび上がってきた。

■資料のステイタスと権利

EPAD事業では、公演映像のアーカイブ化に際して、映像権利者や上演団体から、非営利目的や教育目的利用についての同意を得てデジタル映像を所蔵している。アーカイブに入れた映像の館内閲覧以外にも、学内での教育利用は個別の許諾を求めることなく企画実施が可能だ。利活用を促進するには、上映会などのイベントが有効だが、これまで寄贈、寄託されている映像は、必ずしも権利の確認がなされておらず、その都度、権利者に許諾を求めなければならない場合が多い。しかし、都度の確認が必要な寄託のステイタスや、とりあえず預かるというような預託資料であっても、私立大学が柔軟に対応することで資料の散逸が防げているという側面がある。

コロナ禍でリモート授業が常態化した時期もあり、映像の活用は教育現場に浸透した。**オンラインで学生が公演映像を見られるようなしくみがあったならば、よりアーカイブ映像の利活用が促進されるだろう**という意見が出た。しかし現状では権利処理が済んでいない映像の複製や配信は制限されるので、オンラインや複製を作成しての提供には制約があり、研究者や学生が視聴しやすいしくみづくりが望まれる。

■デジタル・アーカイブの利活用に向けて、さらなる連携を

2021年度に国立国会図書館が図書館、文書館・資料館、大学・研究機関、地方自治体等に対して行った「デジタル資料の長期保存に関する国内機関実態調査」(2,921機関が回答)によると「多くの機関がデジタル資料を所蔵・保有しており、資料デジタル化を進めている実態が明らかになった。長期保存に積極的に取り組んでいる機関もある一方で、大部分の機関において長期保存に係る方針・計画が未策定であるほか、人員・予算の不足が共通の課題として浮き彫りになった」とあり、人員・予算の不足を指摘する声は、本ワーキンググループの構成員だけの課題ではない。むしろ、**アーカイブの実務担当者、アーカイブ設置の当局との認識のギャップがあるという問題ではないか**と指摘する意見もあった。

また、それぞれの大学内であって、図書館との連携が必ずしもとられていないというように、組織内連携の課題もありそうである。

国立国会図書館の同調査では、「デジタル資料の長期保存のために機関同士の連携や情報共有が有効であるとの指摘があった。機関種を超えて実務担当者が定期的に集まり勉強会を開催しているケースも見られる」とも述べられており、本ワーキンググループでも、**アーカイブ同士の横のつながりが、様々なレベルの情報共有を促し、課題解決に資することがあるのではないか**という意見が出た。今後は、拠点地域の異なる大学のアーカイブ等ともつながり、長期保存のための体制づくりや、アーカイブ利活用事業の共同など、情報交換を続けていきたいという意見が表明された。

会議記録

舞台デジタル・アーカイブ連携会議（全てオンライン開催）

- 第1回 2022年9月10日[土] 10:30-12:00
第2回 2022年10月12日[水] 15:00-16:30
第3回 2022年11月14日[月] 11:30-13:00
第4回 2022年12月13日[火] 12:30-14:00
第5回 2023年1月24日[火] 15:00-16:30

EPAD実行委員・事務局をはじめ、デジタル・アーカイブに関心を持つ人々がオンラインで、各回30名前後が参加。

ワーキンググループ会議（於：東京芸術劇場 ミーティングルーム7）

- 第1回 2022年9月23日[金・祝] 18:30-20:30
第2回 2022年10月20日[木] 9:30-11:30
第3回 2022年11月10日[木] 9:30-11:30

委員：◎伊藤真紀（明治大学唐十郎アーカイブ）、○尾崎瑠衣（昭和音楽大学バレエ研究所）、加納豊美（多摩美術大学）

久保仁志（慶應義塾大学アート・センター）、中西智範（早稲田大学演劇博物館）*◎委員長 ○副委員長

オブザーバー：石本華江（慶應義塾大学アート・センター）、樋口良澄（明治大学唐十郎アーカイブ）、堀美香（昭和音楽大学バレエ研究所）

山腰亮介（多摩美術大学）、矢野光重（日本芸術文化振興会）、宮崎信子（国立劇場）、星川哲也（新国立劇場運営財団）

EPAD事務局：米屋尚子、横堀応彦（国際演劇協会日本センター）、高萩宏（EPAD実行委員）

臨時委員会1（於：東京芸術劇場 ミーティングルーム7）

2022年11月17日[木] 9:30-11:30

出席者：佐東範一（特定非営利活動法人ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク）、高橋弘之（一般社団法人現代舞踊協会）、

溝端俊夫（特定非営利活動法人ダンスアーカイブ構想）、尾崎瑠衣（昭和音楽大学バレエ研究所）、堀美香（昭和音楽大学バレエ研究所）

EPAD事務局：米屋尚子、横堀応彦（国際演劇協会日本センター）

臨時委員会2（オンライン）

2022年11月20日[日] 19:30-21:00

出席者：加納豊美、伊藤雅子、鈴木健介、土屋茂昭（一般社団法人日本舞台美術家協会）

EPAD事務局：米屋尚子、横堀応彦（国際演劇協会日本センター）

ヒアリング協力者

宮本圭造（野上記念法政大学能楽研究所専任所員・教授）

谷垣内和子（邦楽研究者）

笹日浩之（寺山修司記念館副館長）

能祖将夫（桜美林大学）

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 デジタルアーカイブ室

■沿革

通称エンパクは、1928（昭和3）年10月に設立。1995年のWEBサイト開設時からデジタルアーカイブ化を進め、国内外の演劇・映画に関する膨大な資料を学術データベースとして順次公開しており、一部のデータベースでは画像、動画、3Dデータも表示。2020年度、EPAD事業で収集された現代演劇・舞踊・伝統芸能の三分野にわたる舞台公演映像の情報検索特設サイトJapan Digital Theatre Archives (JDTA) を開設。エンパクは早稲田大学の文化推進部に属し、組織としては館長、副館長をはじめ、各係に助教、助手がいるほか、嘱託職員、アルバイト、派遣スタッフ等で運営。博物館内図書館の運営は外部委託。デジタルアーカイブ室を置いている。

係の構成は、博物・演劇情報（※）・西洋演劇（※）・東洋演劇（※）・和書・洋書（※）・貴重書（※）・錦絵（※）・映像資料 [映画]（※）・写真・AV・補修（※）の係では助手・助教が担当。各係には派遣スタッフやアルバイトを雇用し、資料整理作業等の業務にあたる

■特徴

デジタルアーカイブ室は、資料を受け入れて、目録を整理した内容を登録する収蔵品の管理システムと、それらを公開するWEB上のシステムとして「文化資源データベース」（文化推進部の共同運営）「JDTA」の2つを所管。それらを「Japan Search」と連携する仕事をしている。JDTAは日英二か国語で検索可能。

その他、資料デジタル化に関連する業務や、デジタルデータの保存業務などを行う。

■収蔵・収集資料

エンパクは日本国内はもとより、世界各地の演劇・映像の貴重な資料を所蔵。錦絵48,000枚、舞台写真400,000枚、図書270,000冊、チラシ・プログラムなどの演劇上演資料80,000点、衣装・人形・書簡・原稿などの博物資料159,000点、その他貴重書、視聴覚資料など、およそ百万点にもおよぶ膨大なコレクションを所蔵。早くからデータベースの構築や資料のデジタル化に取り組んでおり、世界有数のコレクションである浮世絵や浄瑠璃丸本の影印をはじめとする膨大な資料をデジタル化し、WEB上で公開。

JDTAでは、今年度中に約1,700本のデジタル映像とフライヤーや舞台写真等の関連資料をエンパクのデジタルアーカイブに保存。

■メタデータ整理・維持

資料整理の過程で作成されるメタデータは、収蔵品管理システムの「I.B.MUSEUM（早稲田システム開発）」に登録される。資料整理は、各係の担当スタッフが分担して作業を行なう。

JDTAに関してはEPAD事務局と連携。EPAD事務局から受け取ったメタデータやデジタルコンテンツ等は、アーカイブ処理を経てJDTAに公開する。

■公開・閲覧

WEB上で「文化資源データベース」「JDTA」を公開。

JDTAが所蔵している公演映像は、事前予約制で館内閲覧が可能。

■課題と展望

膨大な資料を受け入れ所蔵しているが、デジタル化予算・マンパワーが限られているため作業が追い付いていない。資料整理作業に当たるスタッフは任期付きのためノウハウ継承の問題や、資料公開のための著作権等の法的対応や技術面など、アーキビストとしての専門性を高める必要性あり。デジタルデータを長期的に安全に保存するための対応や、ポーンデジタル資料の収集・保存が今日的な課題。

関連ウェブサイト

早稲田大学演劇博物館 デジタル・アーカイブ | <https://www.waseda.jp/enpaku/db/>
Japan Digital Theatre Archives (JDTA) | <https://enpaku-jdta.jp>

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 デジタルアーカイブ室



上段——早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブウェブサイトより

下段——Japan Digital Theatre Archives (JDTA) ウェブサイトより

慶應義塾大学 アート・センター

■沿革

1993年に慶應義塾大学アート・センター設立。1998年に土方巽記念資料館（アスベスト館）から、数多くの一次資料の寄託を受けることを契機にアート・アーカイブを開設。アーカイブは2022年に開設から24年目を迎え、その範囲は13コレクションに拡大している。

■特徴

「舞踏」のように、時間の経過に伴い消えてしまう形態の芸術活動を対象としてアーカイブを開始したので、それらにどうやってアプローチすべきかという問いのもと、特定の主題に関する多様な一次資料を収集・整理・保存・管理・調査・公開する機関として発展。研究者のネットワークのハブとして機能し、研究活動を行い、あわせて特定主題に関する研究成果（二次資料）の収集・蓄積と情報化に重点をおく「研究アーカイブ」構築を実践。このような資料群は、歴史的な過去への眼差しをもたらすだけでなく、過去を経由して新たな活動を開始するための未来への眼差しをも包含し、「ジェネティック・アーカイブ・エンジン」として機能することを目指している。一例として土方巽アーカイブでは研究プロジェクトを実施するほか、公演、展覧会、上映会などのイベントを開催しており、新入生歓迎行事舞踏公演、「土方巽を語ること」は毎年開催。

■収蔵・収集資料

土方巽アーカイブ（高井富子・池宮信夫・石井満隆・辻村和子・副島輝人・吉本隆明に関する資料体を含む）、ノグチ・ルーム、田邊光郎／『役者』、瀧口修造、油井正一、慶應義塾の建築、西脇順三郎、渋井清／春画研究、草月アートセンター、峯村敏明、飯田善國、中嶋興、VIC（Video Information Center）のコレクション。舞台芸術も含まれるが美術分野のコレクションも拡張。土方巽アーカイブ所管資料は、写真24,910、動画211、音声資料364、エフェメラ329、舞踏譜スクラップブック16、バインダーおよびスクリプト・シート1,300、原稿バインダー15、書簡2,050、衣裳4、舞台美術20、書籍1,119、雑誌836、新聞記事296、合計30,425件。

■メタデータ整理・維持

土方巽の資料のDB化は3度試みられ、それらの統合が難しいという課題がある。30年の過程の内で度重なる整理方針の変化、多様な資料群の整理の困難さがあり、HPのリニューアルや新規DB（WEB公開）の構築を目指すのが、資金面の不足もあり実現に至っていない。資料整理にあたり、今年度はスタッフ7名（メインは3名、サポートは4名）体制。

■公開・閲覧

土方巽アーカイブおよび、瀧口修造、油井正一、西脇順三郎、草月アートセンター、中嶋興、VIC、峯村敏明の各コレクション、ノグチ・ルーム／慶應義塾の建築プロジェクトの9つは閲覧可能（要事前予約）。その他のコレクションについては要問合せ。

各コレクションごとに整理の進捗は異なる。例えば、土方巽アーカイブは各資料を随時デジタルデータ化しており、公演を軸として、ポスター、チケット、プログラムを中心に資料をまとめた「HIJIKATA Portas Labyrinthus」がWEB上で公開、利用可能。舞踏譜スクラップブックを全ページ確認できる「KUAC Collection Online」にて、渋井清旧蔵艶本研究資料も閲覧可能である。基本データについては、各コレクションページにて目録（PDF）を公開している。また個別のDBにおいて土方、瀧口、油井、ノグチ・ルームのリストおよび資料を一部公開中。VICビデオライブラリ目録は、PDFファイルと簡易検索DBがWEB公開されている。

■課題と展望

主要な資料は三田キャンパスの収蔵スペースで温湿度管理の下保管しているが、ビデオテープや大型資料など一部の資料は、使用頻度や貴重性やサイズなどを鑑みて、日吉キャンパスの収蔵スペースにて保管している。後者は通常の博物館で用いられる温湿度管理設備がないスペースだが、幸い温湿度が安定している。いずれにせよ、両収蔵スペースには限度があるため、受入資料を無尽蔵に保管できるわけではない。寄贈・寄託資料の公開、展示に関する権利処理はその都度実施しているが、今後のWEB公開等の拡張に関しては課題。

関連ウェブサイト

HIJIKATA Portas Labyrinthus | <http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/archive/hijikata/portas/>
KUAC Collection Online | <http://www.art-c.keio.ac.jp/digital-collection/>

慶應義塾大学 アート・センター

ビデオテープ・タイトル(テープのラベルより転写したもの)
 規格 原産国(グループ) 日付 | フォーマット |
 OS (Open-me 2) | OLI (Open-me 1) | ULI (U-memo) | B (Historical)

1. 7月10 - 28日

01. (笠井 敏 伝説の門) (OS)
 57:57 | 音声軌 | 1974年10月5日 | OS
 02. (響水志雄展覧会) (OS)
 39:55 | 音声軌 | 1975年1月6日 | OS
 03. (響水志雄展覧会) (OS)
 33:08 | 音声軌 | 1975年1月11日 | OL
 04. (響水志雄展覧会) (OS)
 33:51 | 音声軌 | 1975年1月11日 | OL
 05. (笠井 敏 伝説の門) (OS)
 51:50 | 音声軌 | 1976年6月3日 | U
 06. (笠井 敏 伝説の門) (OS)
 01:02:32 | 音声軌 | 1976年3月16日 | U
 07. (1981 8/30 Paraビデオステーション)
 18:22 | VC | 1981年8月30日 | B
 08. (1981 8/30 Paraビデオステーション)
 12:23 | VC | 未詳 | OS

2. 7月20 - 28日

01. (アーネスト・ユネスク これがいいのか美術展 イソザキ大
 島三太郎展 音軌) (OS)
 28:22 | 音声軌 | 1976年1月25日 | OS
 02. (アーネスト・ユネスク これがいいのか美術展 イソザキ大
 島三太郎展 音軌) (OS)
 19:34 | 音声軌 | 1976年1月25日 | OS
 03. (宇野浩二) (1981.1.23 シアター座に制作)
 55:08 | 映像軌 | 1976年6月23日 | B
 04. (宇野浩二) (1981.1.23 シアター座に制作)
 43:36 | 映像軌 | 1976年6月23日 | B
 05. (76.1/21 イタリア文化会館 高橋次郎展) (OS)
 09:44 | 音声軌 | 1976年11月2日 | OL
 06. (1982/2/28 ビデオはオモチャだ 夜ボール)
 42:03 | VC | 1982年2月28日 | B
 07. (1982/2/28 ビデオはオモチャだ 夜ボール)
 19:27 | VC | 1982年2月28日 | B
 08. (VIC 文庫録) (OS)
 24:48 | VC | 1983年11月29日 | B
 09. (1983.3.20/4 舞踏祭 舞踏祭音軌) (OS)
 15:33 | 音声軌 | 1976年11月30日 | OS
 10. (フタヒ 本展)
 10:00 | VC | 未詳 | B

Video is a Top! **ビデオはおもちゃだ!**
VIC #1

2017年
7月10日
7月28日
(土日・祝日は休演)
 13:00-18:00
 15:00-20:00 (会場のみ)
 入場無料

慶應義塾大学
 アート・センター
 慶應義塾大学アート・センター主催
 VC #1

プログラム

1
KUAC CINEMATHEQUE

ハナミダシグループを代表し、誰でも見られる、観覧のことも知らなくてもビデオが楽しめる、そう
 いう場になってきたのです。

VIC (Video Information Center) | 1972) は演劇・ダンス・展覧会・シンポジウムなど芸術
 に関わる多種多様なイベントを機動的にビデオで記録しただけでなく、所収のメ
 デアによるコミュニケーションを機動的に含ませる「アート・フィルム」などの活
 動をいじった。当時、すでに文化界に浸透していたビデオは、単なる音楽
 発表までで記録し、録音しようとしたその豪華は、マスメディアは異なるセルブナイ
 グメディアの可能性を帯びるとともに、コミュニケーションのあり方への問いをはら
 んでいます。今回は、慶應義塾大学アート・センターが新たに始める映像展示シリーズ
 KUAC Cinemathequeの第1回として、現在まであまり紹介される機会が少なかった
 VIC自身の活動が明らかになるような上映プログラムになっています。

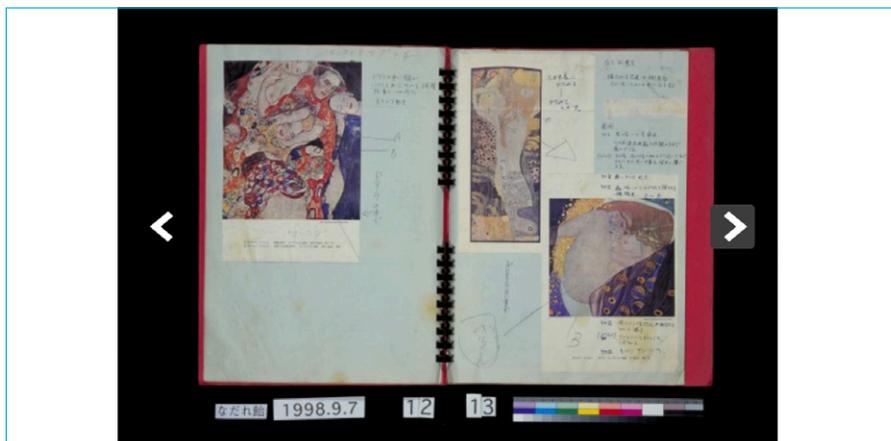
Video Information Center ビデオライブラリ 目録 [English](#)

本リストは、2016年1月より、慶應義塾大学アート・センターに保管されているVICビデオライブラリの目録 (1,209件) である。
 VICビデオライブラリの基礎調査は、2005~2007年にかけて、国際舞台芸術交流センター (PARC) によって行われた。本目録は、PARC作成の目録を元に、フォーマットの再調査、ラベルの記載内容の精査などを加えて作成
 している。
 本目録の改訂は、平成28年度 文化庁 我が国の現代美術の海外発信事業「我が国の現代美術の戦略的発信に向けた現代美術関連資料の整理・情報収集」の支援を受けて実施された。

[プロジェクト概要](#)

凡例
 A: UTM B: デジタル化 C: 主要な個人または集団 D: 主要な個人または集団 (読み) E: テープの背紙または箱から採取した名称 F: シリーズ番号
 G: 年 H: 月 I: 日 J: フォーマット K: イベント名 L: 会場 M: イベント会場

Show	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
VIC 0001													
VIC 0002													
VIC 0003													
VIC 0004													



上段—— Video Information Center 上演会のDM
 中段—— Video Information Center データベースより
 下段—— KUAC Collection Onlineより舞踏譜スクラップブック

昭和音楽大学バレエ研究所 バレエアーカイブとバレエライブラリー

■沿革

バレエ研究所は2006年に開所。1990年代から短大・学部ともにバレエコースをもつ昭和音大ならではの、バレエについての研究施設で、国内で唯一の大学付属のバレエ研究所。

日本におけるバレエ学習者やバレエ教室、バレエ教師の数など、5年に一度の全国調査をしている。近年は、(一社)日本バレエ団連盟の委託調査で、海外芸術団体運営状況調査なども実施している。所員は所長、事務長、研究員、所員の4名。

「バレエアーカイブ」と「バレエライブラリー」は、2015年から2019年度の「バレエ情報機能センターの構築」(文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業)によって構築され、WEB公開は共に2020年3月。

■特徴

バレエアーカイブ：1946年から今日までの約1万件のバレエ公演データを収録している。

「公演記録をさがす」「変遷をたどる」「項目別で知る」の3機能があり、公演記録は、自由語で検索可能で、会場やバレエ団等の詳細情報ともリンクしている。「変遷をたどる」では、「公演プログラムギャラリー」でプログラムの表紙の画像が見られるほか、日本における1946年から現在までの作品別上演回数変遷を見ることが可能。「項目別に知る」に関しては、公演データを作品、バレエ団、人物の項目別に表示することが可能。作品のところでは、振付家情報、初演年、初演以降の振付家などを表示しているだけでなく、関連リンクからはYouTube動画にリンクがある場合もあり、その作品の一部を鑑賞することが可能。年別の上演実績も表示されている。バレエ団については、設立年代順に表示されている。

バレエ分野に特化し、時代が長く、かつ情報の奥行きがあるアーカイブを目指した。システム構築はNPO法人連想出版(国立情報学研究所の高野明彦先生のチーム)。バレエ団の制作現場、広報、研究者やバレエ愛好家にとって使えるアーカイブとして利用されている。

バレエライブラリー：バレエ研究所蔵書データベース。OPACでデータを管理・公開。

■収蔵・収集資料

バレエアーカイブの公演情報データ典拠情報は、バレエ研究所が保有する1万冊を超えるプログラム。主要キャストだけではなく群舞の1人までもれなく収録をしている。WEB公開後は、可能な範囲で情報を追加。

バレエライブラリーで検索対象資料は、バレエに関する和書や雑誌約1500点、洋書約500点、視聴覚資料DVDなど500点。

■メタデータ整理・維持

研究員、所員(いずれも兼任)が対応。設計時から維持費抑制が目指されている。

■公開・閲覧

バレエアーカイブ、バレエライブラリーともにWEB上で検索可能。

プログラムや所蔵資料の閲覧は、学内者は開所時間内にアクセス可能(要予約)。

■課題と展望

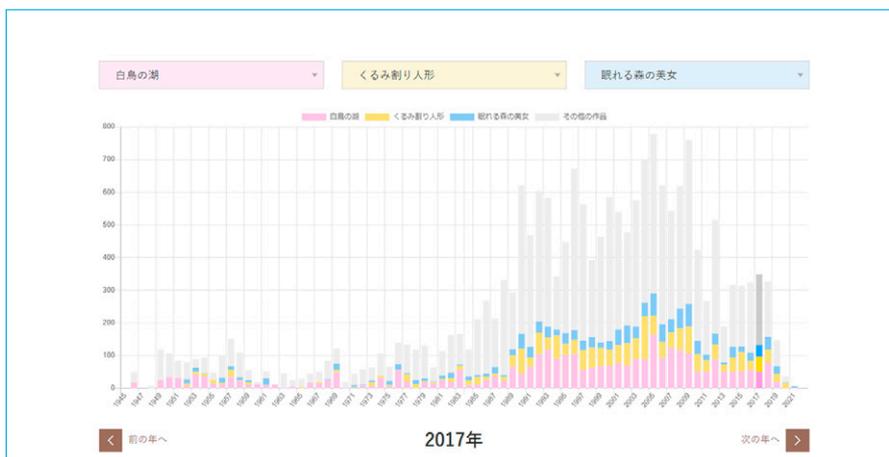
バレエアーカイブは、公演情報のみで公演映像の収集は行っていない。公演映像のアーカイブ化は課題のひとつ。情報の追加に関して、プログラム未入手の場合は、公演情報も入力していない。プログラムの寄贈を呼びかけているが、原資料がなく情報だけ知り得ている場合の対応については要検討。マンパワーの充実と大学内連携の強化も課題。コロナ禍でもあり、研究所で直接閲覧できるのは学内者に限定中だが、学外者の対応は今後検討していく。

関連ウェブサイト

バレエアーカイブ | <https://ballet-archive.tosei-showa-music.ac.jp>

バレエライブラリー | <https://ballet-library.tosei-showa-music.ac.jp>

昭和音楽大学バレエ研究所 バレエアーカイブとバレエライブラリー



バレエアーカイブとバレエライブラリーウェブサイトより

明治大学 唐十郎アーカイヴ

■沿革

2006年に唐十郎氏が明治大学特別功労賞を受賞、明治大学中央図書館で唐十郎展を開催。2012年に唐氏が文学部客員教授に就任。その年の5月に転倒事故で現在まで療養生活に入っているが、2015年に唐氏より母校である明治大学に寄贈・寄託された資料をもとに唐十郎アーカイヴを設立。2019年にセゾン文化財団の助成をうけてデータベースを構築。

明治大学文学部の中に唐十郎アーカイヴ運営委員会を設置して運営。委員は文学部文学科演劇学専攻ほかの教員、寄贈・寄託者の大鶴家から代表者、劇団唐組座長代行、唐十郎研究者で構成。運営スタッフは文学部事務室スタッフが兼任している。

唐十郎氏の演劇資料を中心に現代演劇の資料を収集・整理するとともに『実験劇場と唐十郎 1958-1962 - 「アングラ」の前に「実験」があった!』（2018年10月）など一般向けの展示、シンポジウムを開催。

■特徴

教育・研究に資すると同時に、学生・教職員・研究者とつながるための、文化的な拠点としての在り方を模索中である。デジタル・アーカイヴの可能性を考えるために、慶應義塾大学アートセンターと共同でオンライン・シンポジウム『映像と演劇アーカイヴ』（2021年3月）を開催したり、劇団唐組による特別講義を唐組テント内で行ったり、唐十郎の活動への関心を高めアーカイヴの利活用を促す事業を実施している。

■収蔵・収集資料

- ①自筆原稿・自筆資料
- ②チケット・ポスター等
- ③劇団内部活動記録資料（非公開資料）
- ④写真・書簡・記念品等
- ⑤関連書籍・雑誌等
- ⑥原稿・版下等
- ⑦上演台本等
- ⑧写真パネル等
- ⑨小道具等
- ⑩映像関係資料（DVD）その他

演劇のみならず諸分野にわたる活動に関する資料約900点

■メタデータ整理・維持

文学部嘱託職員1名が開設当初より担当。

■公開・閲覧

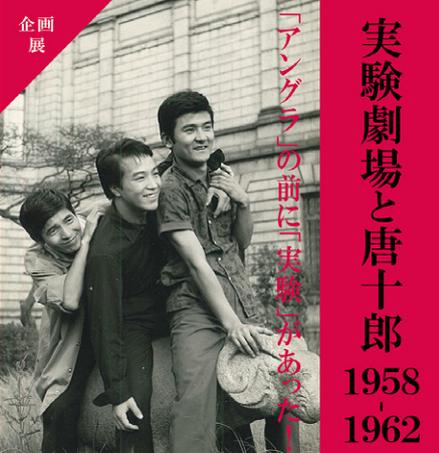
メタデータ整理は終わっているが画像データの整理中。サイトは公開しているが検索機能を備えたDBのWEB一般公開は、現在準備中である。

■課題と展望

サイト上に「ギャラリー」（仮称、2023年3月の公開を予定）を設置・公開して、過去のイベント資料のデジタル公開をしたいと考えている。

原資料の閲覧・公開については収蔵・公開場所の確保ができておらず未定だが、将来的には閲覧が可能となるよう環境を整備していきたい。今後上演される、唐十郎作品、劇団唐組の公演資料などは、どのように追加していくのか、保存についての課題もある。

明治大学 唐十郎アーカイブ



コングラの前に「実験」があった！

実験劇場と唐十郎
1958
1962

2018
10/5(金)~10/28(日)

明治大学駿河台キャンパス 図書館ギャラリー

開館時間 平日 8:30~22:00
土曜 8:30~18:00
日曜 10:00~17:00

主催 明治大学文学部
共催 明治大学文学部図書室 TEL: 03-3296-4180

唐十郎新発見原稿多数展示！

1958年

第2回11年生発表会『海の魂の6人』(コトマン作)
『死の前』(スリットノ作)
6月 大学院ホール
第3回公演『越前屋』(R-セーズ作)12月 記念講演会
*唐十郎(大塚義典)明治大学文学部演劇学専攻に入学。
*大塚義典(大塚)『唐十郎の歩み』『実験』に収録。
以下、すべての公演上演。

1959年

第3回公演『コングラと骨格つづ』(C-オデッセイ作)
6月 大学院ホール
第4回公演『実験の魂』(イブセン作 アーサー・ミラー脚本)
11月 記念講演会
*『民間の魂』の劇団副団長(10回)が行われた。
11月 演劇部演劇センターを創立。2年連続した。

1960年

第5回試演会『実験』(三好十郎)7月 記念講演会
*6月に日本全産科協が発表した発表反響調査がある。
*演劇部が『実験』の中心、記念講演会が中心、演劇部発表後は
『実験』が公演演劇部、演劇部が発表会によって公演が盛んになった。
『実験』が8月に上演した。

1961年

第5回公演『嵐』(植田詩実)6月 記念講演会
第6回公演『藤野先生』(伊村直武)11月 記念講演会
*藤野先生が明治大学に在学していた。その藤野先生が中心の
12月の劇団による創作公演は、『実験』を意味することになった。

1962年

第7回公演『若い魂の魂』(植田詩実)6月16日 記念講演会
第8回公演『魂』(本下繁二)12月 中野公会堂
*唐十郎は11月に発表、青年公開演劇研究会に在籍したが、しばしば
劇団発表とされる。青年には藤野先生演劇部の関係が
『シネマ・シネマ』(会) (東京演劇の前進)を組織し、その6の
『若い魂』を上演。



上段—— 2018年 駿河台中央図書館ギャラリー | 企画展『実験劇場と唐十郎 1958-1962 「アングラ」の前に「実験」があった！』チラシ(オモテ・ウラ)
 中下段—— 2022年10月11日 明治大学文学部演劇学専攻「特別講義」 | 「唐十郎の演劇世界 2022」樋口良澄氏(講義)・久保井研氏(ワークショップ)

多摩美術大学 多摩美術大学研究ポータルほか

■沿革

多摩美術大学は、2015年に80周年を迎えた美術大学である。2018年に開設された、16の資料体を所管する多摩美術大学アートアーカイブセンター（八王子キャンパス。以下ACC）、数千点余のコレクションを所蔵する多摩美術大学美術館（多摩センター。以下美術館）や、芸術作品としての書物も収集している多摩美術大学図書館（上野毛、八王子キャンパス。以下図書館）など、複数のキャンパスに芸術資料の拠点がある。これらを繋ぐ「メディアネットワーク構想」実現のために、AAC、美術館、図書館、メディアセンター、芸術人類学研究所、そして大学院美術研究科などが連携し、各施設が所蔵する資料の横断検索が可能となるデータベース（以下DB）の構築が、メディアネットワーク推進委員会のもとで進められた。そして2022年3月開設されたWEBサイト「多摩美術大学研究ポータル（BETA）」（以下「研究ポータル」）にてDBが公開された（図1：P.17参照）。

■特徴

このDBは、作品群や各資料体の情報をニュートラルに収集し、それらの関係を動的、立体的に構築していけるよう目指されている。現在公開されているベータ版では、AAC、美術館、大学院美術研究科、情報デザイン学科の協力によって集められた作品や論文データに加えて、DBを検索、表示するためのクライアントサイドのライブラリも公開している。^{※1}本サイトのために新たに開発したソフトウェアを、オープンなライセンスで広く活用できるよう配慮されている。

■収蔵・収集資料

AACでは、秋山邦晴、安齊重男、勝見勝、加山又造、三上晴子、和田誠など16の資料体を、美術館では、古美術・考古学資料、多摩美術大学の教員を務めた作家の作品・資料によるコレクション、版画コレクション、企画展から派生したコレクション等を、図書館では「言語と美術コレクション」として河原温をはじめとしたアーティストのブックアートや詩画集、オリジナルプリント、肉筆資料、その他諸資料を所

蔵している。なお「研究ポータル」には含まれていないが、美術学部演劇舞踊デザイン学科では学内共同研究として舞台美術家・吉田謙吉を対象とした資料のデジタル化と研究を行い、その成果を書籍にまとめている（図2：P.17参照）。

■メタデータ整理・維持

各拠点にて行われている。

■公開・閲覧

AACの資料体のうち、瀧口修造文庫の資料約1万点が「研究ポータル」で公開されている。閲覧公開は、現在2つの資料体に限られ、今後の整理が待たれている。DBで掲出されているのは文字情報のみで、書影などはまだ含まれていない。作品資料のデジタル化も進行しているが、WEB上でのデジタルアーカイブの公開は著作権の問題等もあり、現在は文様アーカイブだけが前述のDBから独立して公開されている。^{※2}

■課題と展望

上野毛キャンパスの演劇舞踊デザイン学科およびその前身に位置づけられる多摩芸術学園演劇学科・芸能美術学科、美術学部二部芸術学科、造形表現学部映像演劇学科では、長岡輝子、清水邦夫、萩原朔美、野田秀樹などの演劇人が教鞭をとってきた。同学科では、その活動の中で形成されたコレクション（図3：P.17参照）を核とした資料収集を検討している。また「学内共同研究」として、日本舞台美術家協会と協働で舞台美術家の資料収集を行ってきた。今後は、多摩美術大学の上演芸術教育の資料体およびDBの構築、資料研究を進めることが検討されている。

※1 ——「TAUEDA2Engine for Client side JavaScript」（<https://mn.tamabi.ac.jp/research/download.html> | 最終閲覧日: 2023年1月4日）

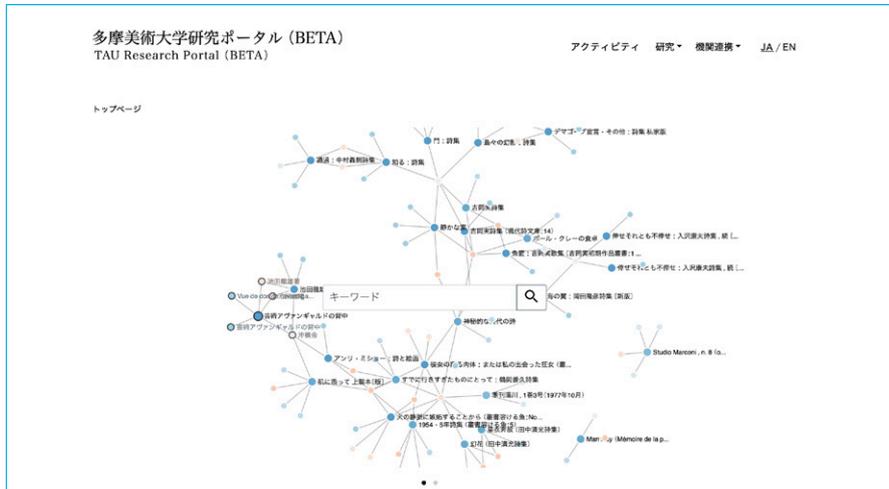
※2 ——「多摩美術大学 文様データベース&アーカイブ TAMA MON 22 ON web」（<https://tamabi.ac.jp/research/tamamon22/> | 最終閲覧日: 2023年1月4日）

関連ウェブサイト

多摩美術大学アートアーカイブセンター（AAC） | <https://aac.tamabi.ac.jp>

多摩美術大学研究ポータル（BETA） | <https://mn.tamabi.ac.jp>

多摩美術大学 多摩美術大学研究ポータルほか



上段:図1 ——「多摩美術大学研究ポータル (BETA)」 | 監修:久保田晃弘、デザインフォーマット: 佐賀一郎、制作:堀口淳史 | <https://mn.tamabi.ac.jp> (最終閲覧日: 2023年1月4日)
 中段:図2 ——『多摩美術大学学内共同研究『近代日本の演劇と吉田謙吉』研究記録・資料集 ~本業は舞台美術家です~』多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科研究室、2022
 下段:図3 ——野田秀樹関連舞台記録 (演劇舞踊デザイン学科研究室 本人蔵)

ダンスアーカイブ構想 大野一雄デジタル・アーカイブ

■沿革

大野一雄アーカイブは、大野一雄（1906～2010）の資料を収集・保存・管理することを目的に、大野の活動の最盛期である1990年代半ばに活動を開始。2002年にはイタリア・ポローニャ大学に資料提供し、演劇音楽学部（DAMS）に大野一雄アーカイブが開設されている。2016年に大野一雄舞踏研究所のアーカイブ活動を引き継ぐNPO法人ダンスアーカイブ構想を設立した。90年代の活動初期より、アーカイブ資料を活用する新たな価値創造に積極的に取り組み、舞台作品制作、書籍出版、映像作品制作、展覧会開催、フェスティバル開催など多様な形態で国際的に展開している。

ダンスアーカイブ構想は大野一雄アーカイブの運営のみならず、さらにそのデータベース設計とシステムを拡張して、他団体／個人が共用可能な方途とし、広範囲の舞踊文化財が多様なダンスアーカイブとして構築され、活用されることを目指している。2020年のEPAD事業では協力団体として作品収集を担い、横浜ダンスコレクション、Dance New Airと共に151本の作品を収集した（うち、配信可能化10本）。

■特徴

大野一雄の衣装、舞台道具など作品に登場するオブジェから、ドローイングなど美術価値のある手稿、また写真、フィルム、ビデオテープ、デジタルデータ、チラシ紙資料など複製可能メディア、1960年に建築されたスタジオ（大野一雄舞踏研究所）、また新たに収集されるオーラルヒストリー、3Dデータなど、多岐にわたるオリジナルメディアを「アーカイブ」という枠組みに含め、一次資料のデータベース化を進めるとともに、日英二言語で閲覧と検索が可能なデジタルアーカイブシステム構築を目論んでいる。

■収蔵・収集資料

大野一雄の公演周辺資料を中心に約25,000点を有する。

■メタデータ整理・維持

日英で検索可能。（一部、メタデータは整備中で日本語のみ）

■公開・閲覧

デジタル・アーカイブ化した資料の一部はウェブサイトで検索可能。「ひと」「こと」「もの」に大きく分けて、サブカテゴリーは、カスタマイズすることが可能なシステムになっている。

詳細は下記ウェブサイトを参照のこと。

Dance Archive Network

<https://dance-archive.net/jp/archive/>

■課題と展望

一次資料の保管場所、保管方法の改善、保管にかかる費用とマンパワーの確保は常に課題。

現代舞踊への社会的関心が高いとは言えない状況で、ダンスアーカイブは危機に立っている。アーカイブが市民権を得ていくには、アーカイブがいかなる範囲のダンス文化を視野に入れ、いかなるユーザーを対象に構築するのかという目的をもって、社会における役割を自ら開拓し、具体的に実践することが、現在益々必要と思われる。

関連ウェブサイト

Dance Archive Network | <https://dance-archive.net>

アーカイブス 大野一雄舞踏研究所 | http://www.kazuohnodancestudio.com/japanese/archives/poster/index_01.html

ダンスアーカイヴ構想 大野一雄デジタル・アーカイヴ



Dance Archive Networkウェブサイトより

舞台芸術分野におけるデジタルアーカイブの展望

中西智範 [早稲田大学 坪内博士記念演劇博物館 デジタルアーカイブ室]

舞台芸術の制作過程において生成されるチラシや台本などの様々なものや情報（以下「舞台芸術関連資料」とよぶ）は、舞台芸術文化を次世代に継承するための貴重な文化資源である。舞台芸術関連資料は、さまざまな理由によって廃棄・消失・散逸されてしまう場合が多く、権利の問題などにもより、専門のアーカイブ機関に受け入れられる資料はごく僅かである。

学術・商用利用など様々な利活用を促進するためにはデジタルアーカイブが重要な役割を果たす。劇団やカンパニーでは独自のアーカイブ（資料収蔵庫やデジタルストレージなど）を持つことを選択できるほか、消失や散逸を免れるために専門のアーカイブ機関への受け入れのオプションも選択できるよう、分野全体でのアーカイブの仕組みの検討が求められる^{※1}。デジタルアーカイブは、それら個別のアーカイブとデータ連携され、メタ情報や所在情報の検索、アクセス方法の情報提供、権利処理などの統合的な機能を持つとともに、舞台芸術関連資料の利用による、劇団・カンパニーへの収益還元の仕事も備えた、統合的なプラットフォーム^{※2}が構築されることが期待される。一連の活動の中では、アーキビストが大きな役割を担うこととなる。舞台芸術文化そのものの価値を言語化し社会に広めたり、劇団やカンパニーと専門のアーカイブ機関をつなぐコミュニケーターの役割を担ったりなど、舞台芸術分野におけるアーカイブ機能のハブ役となることが期待される。

近年の情報化の流れの中で、舞台芸術の制作過程においてもチラシや台本をはじめ、様々な記録情報はデジタルで生成されている。このようなポーンデジタルの情報は、物質的な劣化や収蔵場所の確保などの問題は低減されるものの、デジタル情報を適切に保存・管理しなければ、永久に内容が失われてしまうという重大な危険性も孕んでいる。デジタル情報の保存については、国内では議論や対策が不十分であり^{※3}、具体的な解決方法が見つからない状況にある。劇団やカンパニーから、専門のアーカイブ機関へのポーンデジタル資料の受入強化や、アーカイブ機関同士が連携・協力する形でのデータの分散保存などをはじめとし、MLA連携^{※4}による課題解決の活動がますます重要となる。

※1 —— 海外に目を向けると、コミュニティ型のアーカイブの課題解決の対策が取られている。劇団やカンパニーにおける独自アーカイブの構築の手引書の提供や、資料保存についての知識の共有、デジタルアーカイブ構築の取組みなどをはじめとする多くの事例が参考にできる。

そのほか、舞台芸術分野のアーカイブとして、「何を残すか?やどんな利活用が可能か?」などを、分野全体として議論することも重要な課題である。

●米国: American Theatre Archive Project

<https://www.americantheatrearchiveproject.org/>

●イギリス: Association of Performing Arts Collections (APAC)

<https://performingartscollections.org.uk/>

※2 —— 各アーカイブが独自のデジタルアーカイブ・システムの機能を持つ場合でも、そうでない場合でも、各デジタルアーカイブ・システム同士が相互に連携され、全体としてデジタルアーカイブとしての役割を果たすことが重要である。そのためには、上演作品、制作者、出演者、劇団・カンパニー、劇場などの各種索引データベース（各レコードには識別子[ID]を付与し管理する）の整備が欠かせない。分散されたデジタルアーカイブで構成された場合でも情報同士の紐付けが可能（容易）となり、利活用がより促進されることが期待できるためである。

ジャパンサーチの活用のほか、Japan Digital Theatre Archivesのアーカイブ機能強化や活用なども視野に入れながら、単一のデジタルアーカイブや情報システムのみに依存しない運用が現実的であろう。

※3 —— 国立国会図書館が実施する「電子情報の長期利用保証に関する調査研究」事業において、令和3年に実施した「デジタル資料の長期保存に関する国内機関実態調査」では、国内機関におけるデジタルデータの長期保存の課題が報告されている。

●「電子情報の長期利用保証に関する調査研究」

<https://www.ndl.go.jp/jp/preservation/dlib/research.html>

●デジタル資料の長期保存に関する国内機関実態調査 エグゼクティブサマリー

https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_12300247_po_digital_preservation_report_FYR03_00_summary.pdf?contentNo=1&alternativeNo=

※4 —— MLA連携:博物館 (Museum)、図書館 (Library)、文書館 (Archives)の間で行われる種々の連携・協力活動のこと

慶應義塾大学アート・センター —ジェネティック・アーカイヴの試み

石本華江 [慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ]

30周年を迎える慶應義塾大学アート・センターは「ジェネティック・アーカイヴ」という概念を掲げ^{※1}、多様なアーカイヴのあり方を考える一例を提示してきた。自らも生成し、成長してゆくアーカイヴのモデルとして、これまでの試みについて述べたい。

土方巽アーカイヴには研究者だけでなく舞踏ファン、舞踏を学びに来たアーティストなど、世界各地から多くの人々が来訪する。彼らはアーカイヴにて映像や写真、文献に触れ、創作活動のインスピレーションを得る。もはや会うことが叶わない土方に、資料に触れることで「出会う」こと。この点でアーカイヴの果たす役割は大きい。資料保存において矛盾を抱えるが、オブジェクトベースラーニングの観点ではアーカイヴだからこそその経験を供している。また「舞踏情報センター」として機能を果たしていることも、特筆すべきであろう。研究及びネットワークのハブとなるだけでなく、広く舞踏について情報を得る場をバイリンガルで提供している。サポートを行った事例は枚挙に遑がないが、昨年の例を2件だけ紹介する。川口隆夫氏は1965年の「バラ色ダンス」^{※2}についてリサーチを行い、新作「『バラ色ダンス 純粋性愛批判』序章」^{※3}を創作された。また山崎広太氏の「机の一尺下から陰が忍び寄ること」^{※4}では、ダンサーやスタッフがアーカイヴにて舞踏について学び創作に生かされた。

また催事を企画、特に継続開催することは重要な意味を持つ。命日に毎年行われる「土方巽を語ること」^{※5}は12年目となる。土方を知る世代が語り合うだけでなく、若手、学生も交えてオーラルヒストリーとしての「記憶」をリレーする機会となっている。29回を迎える新入生歓迎行事舞踏公演^{※6}も、毎年恒例の企画として多くの来場者に親しまれている。第一

線の舞踏家による公演を観る機会を学生に与えており、意義の有る催事である。私事だが、筆者も大野一雄氏による公演に触れ、舞踏を観る初めての経験となったことを書き添えておく。大袈裟な言い方ではあるが、慶應義塾大学に入学していなければ舞踏に関わることもないまま現在に至っていたかもしれない。まず現職に至ることはなかったであろう。

アーカイヴが研究、創作の場として機能していること。来訪者による利用が新たな資料を創り出し、その資料が補完されアーカイヴそのものが成長する「循環」を実現させてきた。「ジェネティック」という指針に基づきつつ、積極的な批判を要請しながら今後も継続した活用・運用のあり方を考えてゆきたい。

※1 —— 柳生康弘「『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン』におけるドキュメンテーションについて」『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン——デジタルの森で踊る土方巽』慶應義塾大学アート・センター・ブックレット6、2000年、18頁

※2 —— ガルメラ商会謹製《暗黒舞踏派提携記念公演》〈バラ色ダンス——A LA MAISON DE M. CIVECAWA (澁澤さんの家の方へ)〉、1965年11月27-28日

※3 —— 川口隆夫「『バラ色ダンス 純粋性愛批判』序章」、2022年10月14-16日 | <https://lit.link/en/rosentanz65> (2023年1月9日参照)

※4 —— 山崎広太 劇場プロジェクト2022「机の一尺下から陰が忍び寄ること」、2022年12月28-30日 | <https://bodyartslabo.com/kota2022/> (2023年1月9日参照)

※5 —— 「土方巽を語ること」の催事報告は『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.18-29、2011-2021年を参照

※6 —— 2001、2002、2007、2009年は非開催。新入生歓迎行事に関しては、慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会(HAPP)のウェブサイトを参照 | <http://happ.hc.keio.ac.jp/> (2023年1月9日参照)



ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク(JCDN)のDANCE DOOR

佐東範一 [ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク(JCDN)]

JCDNは、2020年度のEPAD事業で、公演映像の収集を担う協力団体のひとつに選定され、89作品を収集、そのうち配信可能化ができたのが19作品だった。1990年頃から日本のコンテンポラリーダンスは盛んになっていて、配信したい作品も沢山あったが、既成の楽曲を使った作品が多く、海外の楽曲を使っている作品は許諾が得られず、配信できる作品は予想より大幅に少なくなった。どのようなプラットフォームで配信をするかという段になって、JCDNでコンテンポラリーダンス専用の配信プラットフォームをつくって、そこで発信しようという計画をたてた。

2021年の6月30日にダンスビデオ配信サイト「DANCE DOOR」はオープンして、EPADで集めた17作品を特集『1990/2000』というタイトルのもとに配信している。サイト立ち上げ前に、EPADの弁護士に協力を得た。また、振付家等のダンス関係者に著作権についてのオンラインセミナーを開催して無料公開もしている。

各作品、2分程度の予告編は無料で視聴でき、作品全部を観たい場合は1本1週間550円、17本全部が見られるセットレンタルは1ヶ月1100円という料金。また、VRの映像を別途13本制作したので、それも同じ料金体系。配信のしくみとしてはvimeoを使っており、レポートが出るので視聴者の状況を把握することができる。サイト開設時、2021年6月30

日から2022年11月30日までにサイトを訪れた人は9,008人、実際に視聴した人の数1,363人、一人の人が複数作品を見たりするので、視聴者の実数としては229人。数は少ないが地域は全世界からアクセスがあって、海外発信はしやすいという実感がある。反省としては、予告編を2分と長くしたために、予告編だけを観て満足し、本編に至らない人がほとんどで、今後予告編をさわりだけにする必要があったと思う。

この間の収益は、手数料を引かれて209.64ドル。運営にかかる直接経費は、vimeoが1年間6万円(5テラ)、サーバー使用料・保守管理料やJASRACの包括契約など年間23万円以上かかる。これにはJCDNの事務局経費、人件費は含まれていない。当初、順次作品数を増やして広報もしていく予定だったが、当てにしていた人が他に就職してしまい、計画どおりに運営できなかったため採算がとれるところには至っていない。

ダンスの公演期間は短く、なかなか観ることができないので映像で観る機会を提供したい。また、今ダンスを創作している若い人たちは、伊藤キムなどの2000年頃の作品について知らない。そういう人たちにてもらいたいという想いで特集『1990/2000』をアップしている。今後各アーティスト・カンパニーの特集を組みたいと考えている。



ダンス動画配信サイト「Dance Door」
(2021～)

Dance Door | <https://dancedoor.jp/>

ワーキンググループ会議とヒアリングを通して

EPAD事業では、2020年から演劇・舞踊・伝統芸能の3分野の公演映像の収集と配信可能化に取り組んできたが、公演映像の収録、収集、利活用に関して、分野間でも意識、対応の傾向に違いがあるようだ。

演劇分野においては、早稲田大学演劇博物館が早くからデジタルアーカイブ化に取り組んできたのに対し、舞踊分野では、土方巽アーカイブという先行事例はあっても、舞踏というサブジャンルに留まり、溝端俊夫氏（ダンスアーカイブ構想代表理事）が指摘するとおり、「ダンスを横断的にあつかうアーカイブの構築が実現されていない」。この点について、舞踊年鑑の編集に携わっている高橋弘之氏（現代舞踊協会事務局長）によれば、デジタルアーカイブのウェブ公開に対する壁として、①著作権等、権利処理の壁、②主催者の意識、③プラットフォームの壁、④財源の4点を挙げている。②の主催者の壁というのは、生の舞台上で観られる以外に映像で記録されることに対して積極的でなく、また拒否する人も少なくないという実状を指摘していた。

消えていくからこそ舞台芸術には価値があるという見方は根強い。伝統芸能については、口頭伝承による芸能伝授が根幹にあるため、さらに多聞を憚る傾向が強い。習得した秘曲を不特定多数に向けて公開することは、そもそも想定されていなかったりする。したがって、教育機関や非営利目的の上映は著作権法上は権利者の許諾がなくても認められるが、そのような場合でも演者などから了解を得てからでないといけないという慣行が深く浸透している。新型コロナウイルスの感染拡大で公演ができなくなったことが、伝統芸能分野でも映像をWEB上で公開する契機となったことは確かだが、関係者が全員納得しなければ公開しないという姿勢は変わっていないと思われる。「能楽資料デジタルアーカイブ」を運営している野上記念法政大学能楽研究所は、昭和初期の8ミリフィルムで撮影された貴重な演能の映像のデジタル化して公開はしているが、デジタル化の基本は文献類の閲覧の利便性のため。目下、文書や近代雑誌のデジタル化と、その検索システムの充実、公開が最優先で、公演映像の収集には積極的には取り組んでいない。専任所員の宮本圭造氏によると、能楽師の家には先代

の芸を学ぶために撮ってあったビデオなどが沢山あると思われるが、公開を前提として撮られたものではないため、利用面でのハードルが高いのが現状とのこと。能楽師が公開を了解していないものを扱うわけにはいかないという。放送番組の録画などは教育目的で利用することはできても、一般人対象の有料講座などで使用するのは難しく、「そうした幅広い用途に対応したものとして、国立能楽堂などが所蔵する映像を、部分的にでも利用できないかと思うことはある」と語っていた。

国立劇場に期待する声は、能楽以外の伝統芸能分野からも聞かれた。国立劇場や国立能楽堂、国立文楽劇場での主催公演だけでなく、例えば重要無形文化財総合認定を受けている団体や芸術選奨の受賞者等が関与する公演など、範囲を広げて記録を継承していくしくみを整備できないだろうか。各団体がアーカイブ化していくだけの余裕がないため、サポート体制の充実が望まれる。

溝端俊夫氏は、「いずれのアーカイブ運営組織も資料の保管場所、保管方法、保管にかかる費用とマンパワーに同じ困難を抱えている。このまま行けば、体力の乏しい組織の所持する資料から次第に潰えていく。またデジタル化資料の保管は、より未知のより困難な領域の課題であり、広くデジタルアーカイブ一般に共通する根本課題として、国を挙げての施策がとられるべき問題だ。」と表明しており、ワーキンググループの会議参加者と課題の認識と危機感を共有している。

中西智範氏が指摘するように、今日、デジタルアーカイブへの期待が高まってきているが、だからこそ「分野全体でのアーカイブの仕組みの検討」「アーカイブ機関同士の連携・協力」が重要だと思われる。舞台デジタル・アーカイブ連携会議をはじめ、さまざまな連携を通して、アーカイブを支えるしくみの強化が求められている。（執筆：米屋尚子）

シンポジウム

EPAD事業では舞台公演映像のアーカイブ化を進めていますが、舞台公演映像が、教育・研究・国際交流の各現場でどう利活用されているのか、コロナ禍を経て、さらにどのように利活用できるのか、その具体的な方法や可能性について考えるシンポジウムを12月1日に開催しました。登壇者の発言要録を紹介します。

2022年12月1日[木]

EPAD2022

撮る、のこす、使う!

～舞台公演映像の利活用をめぐるシンポジウム～

第一部 「教育・研究の現場から」 13:30-15:00

第二部 「国際交流の現場から」 15:30-17:00

(天王洲KIWAよりオンライン配信)

第一部 「教育・研究の現場から」

登壇者：梅山いつき [近畿大学] | 岡室美奈子 [早稲田大学演劇博物館] | 多和田真太良 [玉川大学] | 松山立 [日本大学]

モデレーター：横堀応彦 [国際演劇協会日本センター/跡見学園女子大学]

発言要録



■岡室美奈子

[早稲田大学演劇博物館]

Japan Digital Theatre Archives (JDTA)は、2020年にコロナ禍支援として導

入された文化庁の文化芸術収益力強化事業のひとつであるEPAD事業の一環で開設されたもので、初年度にEPADが収集した約1280本の舞台公演映像の情報を公開している。現代演劇・舞踊・伝統芸能の3分野の舞台公演映像の概要やキャスト・スタッフ名等の情報や、舞台写真、フライヤーの画像なども収集し、公演データは日英2か国語でWEB上で検索が可能。公演映像のうち、配信可能化の権利処理が行われたものについては、3分ほどのダイジェスト映像もJDTA上で見ることができる。

3分映像を実際に見ると案外長いと感じると思う。2020年度に収集した作品の3分映像は、任意の3分を切り出しているものもあるが、映像編集を入れて3分とはいえ見ごたえのあるものも多い。この抜粋映像を教育の場でもぜひ活用してもらいたいと考えており、どう活用するかは今後の課題のひとつ。

2022年11月末に沖縄文化芸術劇場なは一とで開催された『紙屋町さくらホテル』の8K公演映像の上映会に参加したところ、生の舞台では見落としてしまいそうなことも、8Kの定点カメラによる機械

の目を通して、くまなく観る体験ができた。生の舞台映像は別物といわれる時に従来はネガティブな意味合いだったが、ポジティブな意味で別の体験として捉えられるのではないかと

岡室美奈子

生の舞台と映像は別物といわれる時に従来はネガティブな意味合いだったが、ポジティブな意味で別の体験として捉えられるのではないかと



■梅山いつき

[近畿大学]

JDTAの検索機能をうまく活用すれば、各年代

の特徴を伝達できる。例えば2000年以降の3分映像のある作品を抽出すると、視覚的に作品の多種多様さがわかるが、それはゼロ年代演劇のひとつの特徴と言える。3分という短いダイジェスト映像であっても、そのような特徴を学生たちに伝えることが可能である。

映像資料の扱いに関しては大きく2つの問題点を感じている。1点目は、映像があっても、必ずしもそれが教材として適しているとは言い難い点だ。1960、70年代の作品はそもそも映像が残っていないことが大半であり、80年代以降であっても劇作家や演出家が映像記録を公開しないというスタンスをとっている場合、映像が残されていないことが多い。また、舞台映像があったとして、その映像がその作家を代表する作品とは限らない。2点目は、舞台芸術は時間芸術なので、ライブでの上演の時間というものが映像でどこまで再現できるのかという点。教室で映像を観る際の時間と劇場でのライブで体感する際の時間は異なっていて、全くの別物になってしまう。授業で映像資料を見せる場合には、最大でも10分程度が集中力の限界という問題もある。

EPADへの要望としては、今のうちに60年代、70年代の古い映像や野外劇の映像収集を進めてほしい。テントのような仮設建造物による野外劇は、代表者が物故して解散してしまうことで建造物を建てる技術も途絶えてしまうことに危機感を抱いている。そこで、劇場建設の様子などを映像で記録しておくことによって未来につなげていくことができるのではないかと。また、研究者個人が収集した資料を研究者の手元にストックしておくのではなく、研究者が積極的にアーカイブ構築に参与していくこともEPADの活動をさらに充実する上で必要なのではないだろうか。

今のうちに60年代、70年代の古い映像や野外劇の映像収集を進めてほしい——梅山いつき

利用する学生や研究者たちが新たなつながりを派生させる起爆剤のようなものになって欲しい

——松山立

■松山立

〔日本大学〕

今の学生は、授業の実施形態が対面なのかオンラ



インなのかをまず確認し、オンラインの場合、リアルタイムなのかオンデマンドなのかをさらに確認するようになっている。学生が映像を見る場合、教室で大きなスクリーンに投影されたものをみんなで見るという映画館に近いような見方から、オンライン授業で学生が自分のパソコンで個々に見るという場合も生じている。このようにして映像を見ることが、場所も時間も共有しない個人の行為へと変化してきた。

演劇の映像をフルバージョンなり3分の抜粋なりで観るということは、劇場に行く観劇体験の代替行為としてではなく、劇場に行くことは別の行為として捉えた方がよい。個人の行為として映像を見る場合には、一時停止したり、飛ばし見したり、もう1回戻ったり、早送り、倍速で視聴ということも可能になる。これは臨場感のある行為ではなく、作品と一定の距離を取って分析を加えたり、観察者として俯瞰した立場から見るが強まっていく。このような変化を踏まえて、教育現場における記録映像の使い方に関しては、学生というより教師の側の意識が変わっていかねばならないのではないか。

大学では何かの作品を単独で断片的に扱うことは少なく、

歴史の中に位置づけたり、その作品が後世に与えた影響を考えたり、何かに関連づけて扱うことが圧倒的に多い。歴史や文化とのつながりも含めて、アーカイブが活用されやすいしくみがあるとよい。学生をとりまく文化は、演劇、舞台に限らずかなりいろいろなジャンルが混ざった状態なので、EPADの収集した資料も、赤ん坊の脳の中で新しいシナプスが繋がっていくように、サイトの中で繋がっていき、それを利用する学生や研究者たちが新たなつながりを派生させる起爆剤のようなものになって欲しい。

■多和田真太良

〔玉川大学〕

コロナを機に、実践的な授業を進めるにあたって、映像や記録アーカイブとい



うものを授業にどう取り入れるかに関する意識改革が必要だった。演劇の稽古とは実際に現場で見て学習し、共有するものであって、動画で記録して後から見るということは二段も三段も劣ることのように考えられていた。ところがコロナで人が集まることができなくなって映像で記録するしかないという状況になった。成果発表もZOOM演劇や無観客ライブ配信で行わざるを得なくなった際に、視聴者に向けて発信するならば、定点カメラではなく観客の視点でアップにしたり、音の入れ方を工夫するなど、映像監督的な立場が必要になった。上演時間も2時間や3時間の配信では視聴者が減ってしまうので1時間が限度だと感じている。またZOOMでの打ち合わせが一般化したり、稽古プロセスを映像に残すようになったことで、それらの映像も何か利用できる価値があるのではないかと考えるようになった。多くの学生にとって演劇、舞台芸術そのものとの接点が少ないのが現状なので、EPADやJDTAのウェブサイトがその入り口として使いやすいツールになって欲しい。

EPADやJDTAのウェブサイトがその入り口として使いやすいツールになって欲しい——多和田真太良



撮影：菊池友理

第二部 「国際交流の現場から」

登壇者：伊藤達哉 [緊急事態舞台芸術ネットワーク/ゴーチ・ブラザーズ] | 川崎陽子 [KYOTO EXPERIMENT]

成島洋子 [SPAC-静岡県舞台芸術センター] | 堀朝美 [贅沢貧乏] | モデレーター：三好佐智子 [EPAD2022 事務局長/quinada]

発言要録



■伊藤達哉

[緊急事態舞台芸術ネットワーク/
ゴーチ・ブラザーズ]

2020年に「緊急舞台芸術
アーカイブ+デジタルシア

このマインドが問い直された
——伊藤達哉

ター化支援事業(EPAD)]をスタートしてから2年半が経った。いま考えている課題としては「知識」「スキル」「マインド」の3点に整理できる。1点目の「知識」では、舞台創造に関わる者に権利処理や著作権に関する知識があるかどうかで、公演映像の利活用の幅が異なってくるということ。映像を複製したり配信したりするには権利者の許諾が必要だが、そうした権利処理がなされないままの古い映像は利用することができない。コロナ禍となり世界中で劇場が閉鎖された際、欧米の劇場はいち早く過去の公演映像を無料配信して寄付を呼びかけたが、日本では権利処理がなされていないため、そういった対応ができなかった。2点目の「スキル」とは、収録や編集、翻訳字幕に関する技術のこと。また、最新のテクノロジーの進化に対応できるかどうかとも問われる。

最大の課題だと感じているのが3点目の「マインド」で、舞台創造に関わる者には、演劇自体は消えて残らないからこそ良いという美学や、消えていくことを誇りにしている矜持がある。中には、映像に撮って残すとは何事かという受け止め方もある。私自身も昔はそう感じていたが、コロナで演劇公演が出来ない事態に直面して、このマインドが問い直されたと感じている。無料配信されてしまうと、劇場に来る人が減るのではないかという考えもあるだろうが、この2年半の経験ではそれはむしろ逆だということがいたるところで証明された。舞台芸術は時間と空間を共にする芸術だが、映像のデジタルデータ化によって、時間と空間が異なる人たちと作品を共有することができる。



■成島洋子

[SPAC-静岡県舞台
芸術センター]

2008年頃から
新作公演の記録

映像を撮影しているが、その映像を活用する範囲は限られていた。映画館での上映を試みたこともあったが、来場者は少なかった。2020年に「ふじのくにせいかい演劇祭」ができなくなり、急遽オンライン上の「くものうえせいかい演劇祭」を実施した。その後、少しずつリアルな上演に戻る試行錯誤を行うなかで、国際交流基金によるStage Beyond Borders (SBB) の取組みがあった。『グリム童話～少女と悪魔と風車小屋～』を映像化する際には、舞台演出とは全く違った職能が必要だと考え、映画監督の本広克行さんに映像監修を、尾野慎太郎さんに映像演出を依頼して舞台の記録映像だけではない映像構成にした。またアヴィニオン演劇祭で上演した『アンティゴネ』の映像は、SPACとして活用するためにアヴィニオンから買い取ってSBBで配信している。サイト・スペシフィックな上演なので、上演場所も含めて唯一無二のものであるときには特に撮影する価値があると感じている。

こうした映像配信から派生して、国際交流基金メキシコ日本文化センターから、グリム童話と『アンティゴネ』の映像を使ってメキシコの国立芸術院などで上映会とトークイベントの企画が提案され2年連続で開催している。今年は長崎市の遠藤周作記念館で『メナム河の日本人』の上映会とトーク、リーディング・パフォーマンスがあったりと、記録映像を上映する場が増えてきた。

上演場所も含めて唯一無二のものであるときには特に撮影する価値がある
——成島洋子



川崎陽子

[KYOTO EXPERIMENT]

コロナの前と後で記録映像の使い方が異なってきたと感じている。以前はとり

ライブ至上主義ではなく、記録映像も使い方によっては魅力がある

川崎陽子

あえず記録映像を残さなければと、1～2台のカメラでフェスティバルの全ての作品を撮っていた。しかし1台のカメラでは見て面白い映像にはなりにくく、予算の制約上全てを充実させることはできないので、2019年くらいからは撮影にメリハリをつけるようにした。ツアーで来る海外カンパニーの作品は他にも映像があるので京都では撮らず、その分、京都で初演する作品は複数のカメラで撮って編集するというような形にした。記録映像は最初は全部DVDで納品されていたが、その後ブルーレイの時代があり、今はデータで納品されている。いまではvimeoなどを活用して映像データを管理しているので、海外とのやりとりもスムーズになった。きれいな映像を持っているアーティストは、やはりインパクトがあって得だと感じている。

記録映像はたくさんあるけれど置く場がないというような問題を抱えていたので、EPADやTheatre for Allのようなプラットフォームで公開できる機会ができたことはとても有難い。ドキュメンタリー映像や解説動画も配信しているが、上映プログラムやオンライントーク、オンライン感想シェアカフェの企画など、以前は考えもしなかった活用の仕方が、アイデア次第で可能になる。海外のフェスティバルで、アーティストが作品のワークインプログレスを映像で見せるものをキュレーションする機会をいただくなど、これまでになかった映像の使い方を実感している。ライブ至上主義ではなく、記録映像も使い方によっては魅力があると考える機会になった。



堀朝美

[贅沢貧乏]

贅沢貧乏は、山田由梨が大学在学中の2012年に

旗揚げした劇団。山田が立教大学の映像身体学科出身だったこともあり、映像を残して使うということを自然に行える環境にあり、当初から公演映像をDVD化して販売している。10年間で作った16作品のうち映像に残して使えた作品は9作品。なかには収録したものの三面客席で観客の映り込みが多く、DVDにして販売できなかった作品もある。

SBBで配信している『わろうとおもっているけど』は2022年11月にフェスティバル・ドートンヌのプログラムとしてパリで上演した。EPADで配信できてよかったことは4点ある。1点目は、多言語字幕つきで多くの国の方に見てもらえたこと。2点目は、作品やアーティストを知ってもらった機会が広がったこと。YouTubeを見た神戸学院大学男女共同参画推進室から、授業で上映したいという申し入れもあった。パリ公演に際してもフランス語の字幕がついているので事前資料として示すことができ、観劇した高校の生徒との交流機会、劇場に来られなかった生徒に映像を観てもらったこともできた。3点目は、映像用の字幕を踏まえて上演時の字幕のクオリティを上げることができたこと。4点目は、権利者への支払いが可能になったこと。コロナ禍で苦しい時だったので、クリエイターに配信契約料が払えたことは有難かった。配信までのプロセスで権利対価の分配の仕方などもEPADから分かりやすい資料で示されたことが参考になった。小さいカンパニーなので、EPADのおかげで配信にチャレンジできたと思う。

配信までのプロセスで権利対価の分配の仕方などもEPADから分かりやすい資料で示されたことが参考になった

堀朝美



撮影:菊池友理

海外からのコメント

これまでにEPADが収集した作品は、舞台公演映像の情報検索を目的とした特設サイトで公開されています。その中でもJapan Digital Theatre Archives (JDTA)およびSTAGE BEYOND BORDERS (SBB)は英語でもアクセス可能となっています。海外を拠点に活動されるプロデューサーの方々にモニターをお願いして、ご自身の仕事に役立つかどうか検証していただきました。それぞれのサイトの使い勝手などに関するフィードバックを紹介します。

台湾

李惠美 Hueymeimei Lee

[桃園鐵玫瑰藝術節/キュレーター]

この度は2つのWebサイトに関する有益な情報をシェアする機会を頂き、ありがとうございます。台湾の舞台芸術に携わる仲間として、日本からいつでも自由にJDTAやSBBをチェックし、新しい作品も古い作品も視聴できることを嬉しく思います。

実は私はSBBの視聴者で、この春以降、時間がある時は頻繁に最新のビデオを検索しています。一方、今回ご紹介いただければ、おそらく自分ではJDTAのサイトを知らないままだったと思います。さらに、SBBのビデオ字幕はとも役に立ちます。特に演劇作品では頻繁に翻訳の必要がありますし、海外の視聴者として字幕は必要なので有り難いです。JDTAでも同様の利便性があればいいと思います。ま

た、SBBには、演劇作品だけでなく仕組みなどについても、そのクオリティの高さと素晴らしい内容にいつも感心させられます。オンラインビデオがより頻繁に更新されれば、完璧だと思います。

JDTAは日本の数世代にわたるような作品にたどり着くには良いサイトで、広まればいいと思いますが、ユーザーターゲットはアートの専門家や日本に精通した方だと思しますので、私にとっては必要な情報を検索する際、あまり使いやすいとは言えません。検索する前に日本の作品やアーティストの十分な背景を準備しておく必要があり、これはスキップできません。しかしながら、この2つのサイトの価値は書き尽くせないほど素晴らしいと思います。改めてご尽力に感謝致します。

韓国

コ・ジュヨン Koh Jooyoung

[インディペンデント・プロデューサー]

今まで日本の舞台芸術に関する情報を得るためには国際交流基金のPerforming Arts Network Japan (PANJ) やいくつかのフェスティバルのサイトに頼るか、人に聞くかしかなかったと思います。しかし、PANJは国際交流の視点から編集され、紹介される人数や本数も少ないので、物足りなさを感じていました。もし日本語が分かれば、それにいくつかのローカルなプラットフォームが加わるのですが、そちらもまた取り扱う範囲が広くないのが現実です。「総合的」な観点で、さまざまな日本の演劇の情報が得られるサイトができたのはとても助かります。

しかし、総合的なアーカイブは日本演劇への切り口がない人にはあまりにもフラットで、自分の興味や方向性に合う作品やアーティストを探すのにとても手間がかかるので、そうした点も視野に入れ、アーカイブの内容を脈絡をもって編集して紹介するアーティクルなどがあってもいいかなと思いました。

JDTAの場合、キーワード検索というものがあるのですが、ページを開くたびに変わるキーワードだけが見え、全体キーワードがどういう仕組みでどこまでかかっているのかが見えにくいと思います。全体を見ることができれば、そこからの掘り下げが可能になるかと思います。さらに、英語で見ていると、アーティストの日本語の名前や原題などが気になることもあるので、今見ているページからすぐ言語を切り換えられたらとても助けになると思います。SBBの場合、マルチリンガルの情報と字幕の提供やフルバージョンの映像が見られるのはとても嬉しいですが、まだ映像が上がっていないものも多いような気がします。翻訳も少し正確にして欲しい気持ちもありました。(例えば、韓国ですでに上演されている作品のタイトルが韓国上演の時と違ったり。) また、マルチ言語の検索機能があつたら役に立つかと思います。

シンガポール | 浅川いづみ

[エスプラネード プロデューサー]

日本の舞台作品を招聘したいと思っている海外のプロデューサーは多い。しかし、情報やビデオを入手できない、連絡先が分からない、英語で連絡したが返事がない、あるいは海外ツアーのための準備がないと言われたといったケースが多いのではないかと。私も実際にそのような経験を何度かしているが、特に外国人にとって日本の舞台作品の情報やビデオが検索できるこのようなデジタルアーカイブは非常に有意義であると感じる。海外在住で日本の舞台芸術の情報を知りたいと思っている私のような日本人にとっても、とても貴重な情報源だ。今後さらなる充実を期待したい。

このようなアーカイブが海外からアクセスしやすい環境にあることで、より多くの日本人アーティストが海外で紹介され、定期的にツアーを行うような事例が増えることを願う。アーカイブにある情報はスタート時点にはなる。しかし、実際の招聘につなげるためには、アーティストやカンパニー側に声をかけられたら迅速に対応できるシステムと準備があることが重要だ。海外を視野に入れるのであれば、作品を制作する時点からツアーが可能なセットをつくる、キャストを組む、戯曲の翻訳や英語字幕を用意する、英語の作品情報やテクニカルライダーを用意する、ツアー用の契約条件を決めておくなど。このような準備がないまま、「海外のプロデューサーにみてもらいたい、よかったら招聘してもらいたい」と漠然とアプローチしても、実現する可能性は低い。海外の舞台関係者は日本に大きな興味を持っている。でも、日本側が必要な準備をしていないのであれば、まとまる話もまとまらない。

他国の例を挙げると、例えば韓国は政府機関が海外のプロデューサーへのアプローチを積極的に行っている。Korea Arts Management Service (KAMS) と連絡をとった経験があるが、彼らはPAMSやCINARSなどの舞台芸術見本市に参加して海外のプロデューサーと交流して情報を発信している。どのような作品やアーティストを探しているかを伝え、メールでさまざまな情報を送ってくれるだけでなく、連絡先を教えてください、招聘が実現すれば渡航費などの助成制度もある。このような情報収集から招聘に際する助成までを一貫してサポートしてくれる制度はフランスや北欧にもあるが、海外のプロデューサーにとっては非常にありがたい。デジタルアーカイブにある情報に加えて、さらにこのようなサポート機関があると、日本の舞台芸術はもっと世界に出ていくようになるはずだ。

■ JDTAについて

- 作品に興味を持った海外のプロデューサーがすぐに連絡できるように、連絡先が記載されていると実際の海外ツアーなどに繋がりがやすい。連絡先がわからなければ、そこで多くのプロデューサーは諦めてしまう。
- ビデオをオンラインで観られるのかと思ったが、早稲田演劇博物館に実際に行かないと観られないようだ。会員登録&ログインをすることで、無料、あるいは有料にして一部の映像が観られるといった設定にすることは難しいか？ 海外のサイトでは、Professional（舞台業界関係者や研究者などプロとして舞台芸術に関わっている人）かどうかを登録時点で判断し、確認がとれた場合 Professional としてのアクセスが与えられ、より多くの情報やビデオにアクセスできるといったシステムがある。海外の人に広くこのようなサイトを活用してもらうには、実際の映像をオンラインで観られることが理想だと思う。

■ SBBについて

- アーティストリストなどがあり、検索がしやすい。そして何より、ログインなども必要とせずにその場で映像が見られることが素晴らしい。
- ログインしてから見るシステムであれば、ユーザーのデータを取得でき、また、その情報をアーティストやカンパニーにフィードバックすることができるのではないかと。
- アーティストの経歴、あるいは作品のページに連絡先が書いてあると便利だ。ただし、実際に英語など海外からの問い合わせに対応している連絡先であること。
- 今日の日本の現代演劇、コンテンポラリーダンスシーンの全体像が見えてくるアーカイブだと感じる。SBBで興味のあるアーティストの作品を1本ビデオで見て、さらに興味があればJDTAや早稲田大学演劇博物館でさらに情報を調べる、あるいは実際に舞台を観にいくといったステップにつながれば理想だと思われる。この二つのページは現状リンクしていないのだが、リンクすることは可能なのか？

タイ

シリ－・リュウパイブーン Siree Riewpaiboon

[BIPAM <Bangkok International Performing Arts Meeting>、Prayoon for Art プロデューサー]

まず初めに、舞台芸術をアーカイブするデジタル・プラットフォームをつくるという努力は、舞台芸術のエコシステムの成長にとって素晴らしい価値がある。それは芸術鑑賞と創作、両方の芸術教育やインキュベーションにとって有力な情報を提供する。JDTAは、劇場作品の何を／いつ／誰が発表したかという情報の、有益な主要データベースを提供している。これらの情報は、時間軸とアーティストからその劇場シーンを分析する入り口となるだろう。この中で助けになる機能のひとつが、それぞれの作品がいくつかのキーワードでタグ付けされているところである。それは、どんな名前を検索する必要があるのかわからない、日本の劇場シーンの初心者にとって役立つだろう。また、利用者がそのパフォーマンスの年別に索引リストから目を通すこともできる。ひとつ、あると興味深くなるのではないかと思うのは、ある作品の原作（脚本）がどのように違う団体や演出家によって上演されてきたのか、という情報を載せることである。それらの情報間の繋がり、その作品が時代や違う人の手によって、どのように解釈されてきたのか、ということに興味深い見解を与えることができるだろう。

この二つのデジタル・プラットフォームは、作品のモビリティ向上とアーティストにさらに境界を超える機会をもたらすだろう。プロデューサーとプログラマーとしては、アーティストの創作を視覚的に画や動画など、デジタル化された情報で提示することができるというのはいつもとても役に立つ。そしてSBBにはその機能が

ある。しかしながら、このプラットフォームでは、既存の型にはまらない作品の場合にどうカテゴリーされるのか、ということ疑問に思った。もしかしたら、「伝統芸能、ダンス、演劇」というそれぞれの作品についているタグでは多様性に欠けていて、「その他」という仮定ではその創作を正當に評価するには（JDTAのタグに比べると）曖昧すぎるのかもしれない。しかしながら、アーティストやプロデューサー自身も彼らの作品のデジタル化を探索しているということは理解できる。いくつかの作品はデジタル・プラットフォームに合うように、意図的に「映像」のようにつくられている。しかし、特にサイトスペシフィックな作品など、すべての人たちがデジタル版の舞台芸術作品をつくる準備ができていないわけではない。それをするには、もっと予算や映画撮影術の専門知識が必要となる。また、気が付いた疑問としては、このプラットフォームの透明性と、どのようにしてこれらの作品やアーティストが選ばれて、彼らとそのデジタル作品をつくるにあたってどのようなサポートを受けたのか、といった点である。それらが、誰でも見られるようにウェブサイトに記載されているとより良いと思う。

舞台芸術作品の収益性を増進するというEPADの目的については、国際交流基金に著作権がある情報を除いて、まだまだ配給や上映をのばす情報にアクセスするのは難しい。プロデューサー／アーティストらが、デジタル・プラットフォーム上での彼らの権利について、理解を深められるようなプログラムがあるかどうか知れたら良いと思う。

スイス

渡辺真帆

[通訳者・翻訳者]

日頃、日本の演劇を俯瞰して調べるという習慣（あるいは発想）のない筆者にとり、二つのプラットフォームを回遊するだけで、まだまだ知らない日本の舞台芸術界の広がりや蓄積を感じることができた。パンデミックを契機にこうしたデジタルアーカイブの整備・公開が進んだことを有難く思う。以下、「日本国外の演劇関係者に紹介するなら」という視点で、主に英語のサイトを利用して気が付いた点を挙げる。

JDTAは、「演劇博物館が、埋もれていた公演映像や資料を収集・保存しデータベース化したもの」と説明しようか。関心のあるジャンル、アーティスト、劇団がある人にとって探しやすい構造になっており、実演家より研究者向けと感じた。検索ページの「詳細(Advanced

Setting)」を目立つように表示した方が、効率よく探せそうだ。

SBBは、「日本の舞台芸術の多言語配信ポータル」として、より海外の実演家や観客に勧めやすい。これだけの数の作品が無料で観られることは画期的だと思う。使い勝手のコメントとしては、サイト全体の説明ページ（ABOUT）が見当たらないことが気になった。

両サイトとも情報量が豊富なので、「日本の舞台芸術に興味はあるけど何から見たらいいのかわからない」という人のためのガイドコンテンツ整備にも期待が膨らむ。専門家によるジャンル解説と、例として公演資料へのリンクを掲載したキュレーション記事など、日本にも需要があるように思う。

ドイツ

橋本裕介

[ベルリン芸術祭ドラマトゥルク]

そもそも日本で長年舞台芸術の活動をしてきた立場として、特に記録映像の保存を促進するプラットフォームが整備され、記録と公開のための諸々の手続きに関する筋道を指し示していることに感謝したいと思う。個人的にはあと10年早くこのようなものが整備されていたら、2010年前後から始まる国内フェスティバルの勃興とも相まって、異なる状況が生まれていたのではないかと想像する。

仮定の話をして悔やんでも仕方がないので、現在整備されているこのプラットフォームについてフィードバックを述べる。私は舞台芸術のキュレーターなので、作品そのものの理解とともに、どのような文脈でそれを理解し観客に紹介するのかを考えながら作品に向き合っている。

絶対的な理解を前者とするなら、それに必要なのは全編の映像である。JDTAの3分の抜粋映像は、いわゆる予告編とも異なり、基本的に「ある3分間」を切り取っているだけで、それが作品の中でどのような位置付けなのかも分からないため、より深く調べようとするかどうかという意味で逆効果になる場合もある。

相対的な理解を後者とするなら、SBBがどのような根拠でアーティストや作品が選抜されているのかが分からなければ、既知のアーティストの最新作をフォローするためのプラットフォームという役割を超えないだろう。TPAMで行われていた

ような、「ディレクション」というものを特定の個人に委ね、そのコンセプトと共に紹介しても良いのではないだろうか。定期的にそのディレクションを交代し、JDTAのアーカイブから「再発掘」するプロセスを定期的に行えば、古い作品に今日的な意味を再発見できるだけでなく、仮にその作品が再演不可能だったとしても、日本の舞台芸術を紹介したいと考えている海外プレゼンターによる日本の文脈への理解も深まり、現在進行形の作品をどう位置付けるかの検討が促進されるだろう。JDTAの検索候補のキーワード（例えば、「生と死」「泣ける」など）が、どのような目的で挙げられているかは私の立場では理解できなかった。キュレーションにしろ研究にしろ、作品の文脈を把握するためには、文化的、社会的、あるいは政治的な問題意識とどう関わっているのかが重要ではないだろうか。

特に舞踊作品の理解に関して言えば、使用楽曲のリストも併せて記録として明示するのが良いのではないかと考えた。既存の楽曲を使用する場合、多くの振付家がその音楽の持つ歴史的背景や文脈を織り込んで作品を構想しているはずだ。とするならば、楽曲への理解を促進することは、作品そのものの理解を促進することにもつながるはずである。著作権処理がなされて公開されているのであれば、使用楽曲のリストを明示することはむしろ歓迎されることだとも言えるのではないだろうか。

ノルウェー

タラ・石塚・ハッセル

[ナゲルフォース・シア・プロダクションズ制作担当]

デジタルアーカイブが存在すること自体はとても良い。ただ、ひとつのプラットフォームに統一したほうが利用者側（特に外国人）からして情報を集めやすいように感じる。

■ JDTAについて

- 舞台写真とチラシの掲載がしてあるのが当時感を醸し出してくれるので良い。
- 画面の情報配置が整然として見易さを感じさせて良い。
- ウェブサイトに作品映像がほとんど無く、所定の手続きを済ませ、実際に演劇博物館に赴かなければ閲覧不可というのは少しわだかまる。
- 検索キーワードをもっとジャンルで絞ると良いのではないか。検索サイトにアクセスする度にキーワードが変わるのが、利用者に混乱を招くように感じられる。

- 英語サイトの「ご利用方法はこちらから」の項をクリックすると、演博の日本語サイトに飛んでしまう。映像閲覧の手続きが英語サイトからだとは不可能の模様。ここは整備するべき。
- さまざまなキーワードで検索を試みたが、キーワードに該当しているとは思われない項目も出てきてしまう。一つのキーワードに対しての該当項目の範囲設定が広すぎるのではないか。例えば「歌舞伎／Kabuki」と検索すると該当しているとは考えにくい「維新派」の項目が出てきてしまう。おそらく他のキーワードでも同様のことが起こると考えられる。

■ SBBについて

- 映像作品が閲覧できる作品と出来ない作品との視覚的な区分けが欲しい。
- 検索欄が無い。虫眼鏡マークが見当たらないことがどこか不便。

撮る、のこす、使う!～舞台公演映像アーカイブの利活用のために～

EPAD2022

発行者: EPAD2022実行委員会

発行日: 2023年1月31日

制作: 公益社団法人国際演劇協会日本センター

編集・執筆: 米屋尚子、横堀応彦

編集: 永田景子

デザイン: 阿部太一 [TAICHI ABE DESIGN INC.] + 田村京太

協力: NPO法人アートネットワーク・ジャパン、新田幸生、佐原咲来、瀧口さくら、森山詩苑

文化庁令和3年度補正予算 文化芸術振興費補助金 統括団体による

アートキャラバン事業 (コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)

